

梅毒 長年にわたり体を侵す病

梅毒 (ばいどく) は、15世紀末にヨーロッパ人によりアメリカ大陸からヨーロッパへと持ち込まれ、そこからアジア経由で16世紀頃に日本へもたらされました。黴瘡 (ばいそう)、唐瘡、楊梅瘡 (ようばいそう)、ひえ、しつなどの別名があります。細菌・梅毒トレポネーマによる性感染症で、数年から数十年かかって進行しました。特効薬がなかった江戸時代には鼻が落ち、皮膚や筋肉、骨に腫瘍ができたり、脳や神経が侵される人も数多くいました。末期には体が腐乱して穴が開くこともあり、苦しみながら死を迎えました。

病気とどのように闘ったか

ヨーロッパでは水銀軟膏や水銀の蒸気による治療法が行われました。日本でも初期の梅毒に対して、軽粉 (けいふん; 塩化第一水銀) を利用し、民間の治療薬としては山帰来 (さんきらい; サルトリイバラ) を梅毒や水銀中毒の際の皮膚疾患 (腫れものやむくみなど) に用いました。病気にかかった人は、山野に自生した山帰来を自分で採集して使用しました。

江戸時代、大阪の梅毒専門医・船越敬祐は梅毒にかかりましたが、水銀を使った治療法により持ち直し、患者の治療を行うとともに梅毒の専門書を多数著しました。彼は自分の症状が治まっている時期に梅毒にかかった女性とわざと関係を持ち、自家製の治療薬を試す実験を行いました。

また、その治療経験から、感染経路には①不潔な環境下での性行為により感染する場合と、②母子感染の場合があることに気づきました。

誰にでもわかりやすく紹介



『(絵本) 黴瘡軍談 (ばいそうぐんだん)』
医師・船越敬祐が著した梅毒の治療法を紹介するための読み物。挿絵入りで、医師も一般の人々も読みやすいよう工夫されている。

梅毒の病魔はこんな姿?



梅毒と治療薬の合戦図
武士の姿をした薬が病魔を退治している。